

【開催報告(共催)】

《公開シンポジウム》

「へだたり」の哲学、人間理解の深化、共生社会の模索

—牧野英二著『京都学派とデイルタイ哲学』をめぐる対話—

□ 日 時： 2025 年 2 月 22 日(土) 13:00-18:30

□ 会 場： 本学市ヶ谷キャンパス スカイホール

(ボアソナード・タワー26F)

□ 主 催： 科研費「三木哲学と共生社会」研究班

(名古屋哲学研究会日本思想史部会)

□ 共 催： 法政大学国際日本学研究所 (HIJAS)

□ 協 賛： 法政大学文学部哲学科・法政哲学会

《公開シンポジウム》「へだたり」の哲学、人間理解の深化、共生社会の模索
—牧野英二著『京都学派とデイルタイ哲学』をめぐる対話—

日時 2025年 2月22日(土) 13:00~17:30

会場 法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー スカイホール(26F)

プログラム

時間	内容	講師・司会
13:00-13:15	開会挨拶	司会: 宮島光志氏
13:15-13:30	シンポジウムの趣旨と進め方	司会: 宮島光志氏
13:30-13:45	「本邦哲学を学ぶ」の意義	司会: 宮島光志氏
13:45-14:00	講演: 牧野英二氏『京都学派とデイルタイ哲学』	司会: 宮島光志氏
14:00-14:15	講演: 三木清氏『三木哲学と共生社会』	司会: 宮島光志氏
14:15-14:30	講演: 三木清氏『三木哲学と共生社会』	司会: 宮島光志氏
14:30-14:45	講演: 三木清氏『三木哲学と共生社会』	司会: 宮島光志氏
14:45-15:00	講演: 三木清氏『三木哲学と共生社会』	司会: 宮島光志氏
15:00-15:15	講演: 三木清氏『三木哲学と共生社会』	司会: 宮島光志氏
15:15-15:30	講演: 三木清氏『三木哲学と共生社会』	司会: 宮島光志氏
15:30-15:45	講演: 三木清氏『三木哲学と共生社会』	司会: 宮島光志氏
15:45-16:00	講演: 三木清氏『三木哲学と共生社会』	司会: 宮島光志氏
16:00-16:15	講演: 三木清氏『三木哲学と共生社会』	司会: 宮島光志氏
16:15-16:30	講演: 三木清氏『三木哲学と共生社会』	司会: 宮島光志氏
16:30-16:45	講演: 三木清氏『三木哲学と共生社会』	司会: 宮島光志氏
16:45-17:00	講演: 三木清氏『三木哲学と共生社会』	司会: 宮島光志氏
17:00-17:15	講演: 三木清氏『三木哲学と共生社会』	司会: 宮島光志氏
17:15-17:30	講演: 三木清氏『三木哲学と共生社会』	司会: 宮島光志氏

法政大学 市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー スカイホール(26F)

主催: 科研費「三木哲学と共生社会」研究班
共催: 法政大学国際日本学研究所 (HIJAS)
協賛: 法政大学文学部哲学科・法政哲学会

この公開シンポジウムは本研究所客員所員の宮島光志氏が企画立案し、氏が所属する名古屋哲学研究会・日本思想史部会（科研費「三木哲学と共生社会」研究班）の主催により開催された。本研究所は共催者として会場提供のほか開催準備と運営全般に携わったが、法政大学文学部哲学科と法政哲学会も協賛者として本シンポジウムを大いに盛り立ててくれた。諸般の事情により報告文の作成が大幅に遅延したが、ここに本企画の概要を紹介して後世に語り伝えとともに、関係諸方面に改めて謝意を伝えたい。

【導入】部は研究班の李彩華氏（名古屋経済大学教授）が司会を担当した。まず本研究所の横山泰子所長が「開会の辞」で、標題に掲げられた「共生社会の模索」がHIJASの理念・目的（「トランスナショナルな日本」の研究など）に適っていると述べ、本企画に賛意を表し、会場とオンラインの来聴者を歓迎した。次いで宮島光志氏が「本シンポジウムの趣旨と進め方」を次のように説明した。

牧野英二先生（法政大学名誉教授）の近著『京都学派とデイルタイ哲学—日本近代思想の忘却された水脈』（法政大学出版局、2024年8月）は独日の哲学交流史に関する精緻な研究であり、ヴィルヘルム・デイルタイ（W. Dilthey, 1833-1911）に淵源する「歴史的理性批判」を、京都学派の伝統を超えて、現代日本社会に差し向けようとしている。そうした挑戦的な意図に共感して、同書を起点として《「へだたり」の哲学、人間理解の深化、共生社会の模索》へと議論を発展させる本企画は実現した。第Ⅰ部では対談者と

して野家啓一先生（東北大学名誉教授）を招いて、著者の牧野英二先生と互いの哲学などについて忌憚のない意見交換をくり広げていただく。第Ⅱ部は近代日本哲学研究の第一線で活躍する4氏による合評会であり、最後の第Ⅲ部「全体討議」では、同書の《「へだたり」を哲学する》という基本精神を踏まえて、同書が提起する諸問題を多角的に論じ合い、延いては「人文学の使命」や「共生社会の模索」についても自由に意見交換したい。



（企画立案者・宮島光志氏と総合司会担当・李彩華氏）



（第Ⅱ部の司会担当・森下直貴氏）

なお、第Ⅱ部の司会は、研究班の森下直貴氏（浜松医科大学名誉教授）をお願いした。森下氏は司会者の立場から予備的に主要な4つの論点を列挙したうえで、次のように述べて自由闊達な議論を促した。

牧野先生のご著書では、歴史的理性批判を軸にして、(1) 京都学派によるデイルタイ哲学の受け止め方と対決の仕方について、(2) 全集翻訳を踏まえたデイルタイ哲学の解釈について、(3) 精神科学と自然科学の統一的基礎について、そして(4) 歴史的想像力の今日的意義について論じられている。論点はこの4つになるが、そのすべてが「へだたり」の視点から捉えられ、また「多文化共生」という目標に関連している。

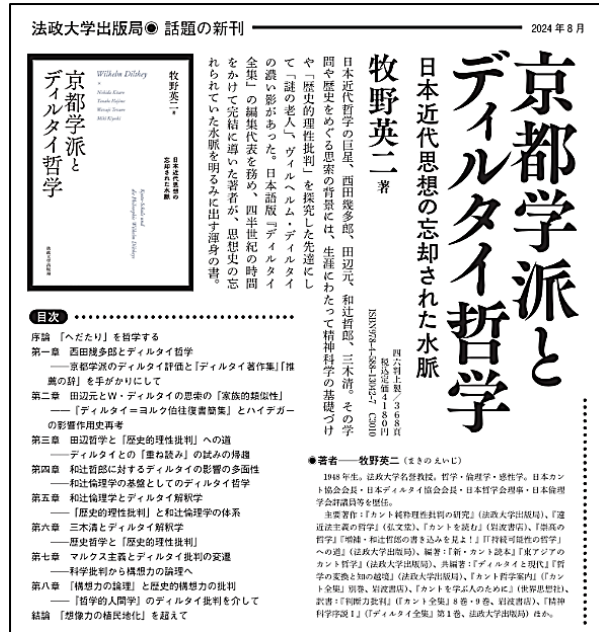
「へだたり」と「多文化共生」はスーパー論点と言える。（…）人の視点はみな偏っている。しかしその偏りは本人には見えない。互いに指摘し合うことで気づくものだ。このシンポジウムではお互いの「へだたり」を確認し合うことになるかと思うが、それが「共生」に近づくための着実な一歩となるだろう。

* * *

前半の【第Ⅰ部 総論】は3つのセッションからなり、宮島氏が司会を担当した。最初に本シンポジウム全体の中核をなす牧野英二先生の基調講演「歴史的理性批判」から「歴史的想像力の批判」へ―「想像力の植民地化」の超克による共生社会の理論構築に向けて」が行なわれた。その冒頭では「2025年1月の『世界終末時計』（Domesday Clock）は人類の終末まで残り89秒を指しています。この危機の時代に私たちはどのように未来世界や共生を語ることができるのでしょうか。この問いには、「危機」（Krisis）の時代にこそ根本的な「批判」（Kritik）が求められていると応じておきます。本日のテーマに即して言えば、拙著の到達点の「歴史的想像力の批判」が求められていると思うのです」と問題意識が語られた。



(基調講演をされる牧野英二先生)



(ご高著を紹介した版元のチラシ[抜粋])

いずれ然るべき機会を捉えて、渾身の基調講演が全文公開されるものと期待したい。

次いで野家啓一先生が、公開書簡形式の「牧野英二先生への寸書」を披露してくださった。この玉稿には野家先生のお人柄がよく表れていた。『京都学派とディルタイ哲学』の書評めいた話は第Ⅱ部の登壇者に譲って、ご自身は牧野先生の最新論文「ディルタイ哲学再評価の試み―「生の哲学」から「生命記号論的解釈学」への道」(『ディルタイ全集』別巻第1部第2章、2024年)を話題にされたのである。

野家先生が「寸書」で取り上げた5つの論点―(1) ディルタイとカントの〈へだたり〉、(2) 廣松渉「共同主観性論」とディルタイ哲学、(3) 「歴史的アプリアリ」をめぐる、(4) 生命記号論的解釈学と言語の役割、(5) ビオス(bios)とゾーエ(zoe)の〈はざま〉―を踏まえて、**牧野先生と野家先生による対談**が繰り広げられた。基調講演と同じく、牧野先生は周到な原稿を準備されて、一々の論点に丁寧に応答された。この半世紀にわたり日本の哲学界をリードしてきた両雄の個性が存分に発揮されていたように思われる。



(←寸書を披露される野家啓一先生)



(↓対談される野家先生と牧野先生)

* * *

後半の【第Ⅱ部 各論】は4つのセッションからなり、森下氏が司会を担当した。以下では、紙幅の都合により、各セッションの論題と構成を紹介するにとどめる。



第1セッションは田中久文氏（日本女子大学名誉教授）の「西田哲学とデイルタイ(第1章)」で、自身の研究スタイルに従って西田全集からデイルタイへの言及を網羅して、6ヶ所に焦点を絞って（純粋経験、精神科学と自然科学の異動、解釈学など）牧野先生の見解を求める形を採った。牧野先生は特に最後の解釈学と「歴史的理性批判」について、踏み込んで回答された。

第2セッションは犬塚 悠氏（名工大准教授）の「和辻倫理学とデイルタイ(第4,5章)」で、育休中のためご自宅からオンラインで登壇をお願いした（機器の不調により出鼻を挫かれたが見事に切り抜けた）。犬塚氏は前半で同書の「特に評価されるべきと考えられる点」を列挙し、後半では「著者に確認させていただきたい点」を丁寧に敷衍した。この模範的な書評と質問に対して、牧野先生も感謝の念をもって応答された。



第3セッションの森村 修氏（法政大学教授）「田辺哲学とデイルタイ(第2,3章)」では「田辺元と／のデイルタイー歴史を語ることの現象学と解釈学との〈あわい〉」と題するオリジナルな論考が読み上げられた。森村氏はフッサールとハイデガーの哲学も絡めながら、ご自身のケア論をさらに深める狙いで玉稿を準備されたものと思われる。牧野・野家両

先生の高弟である森村氏の質問に対して、牧野先生はごく限られた時間で精緻な回答を用意された。

最後の第4セッションは森 一郎氏（東北大学教授）の「三木哲学とデイルタイ(第6-8章)」であった。森氏は「本書の第6～8章は、「三木とデイルタイとの関係を主題的に考察」した画期的研究であり、本書の中心部分をなす。とりわけ、「あるべき三木の政治哲学および創造的構想力を探究することは、ハンナ・アーレントの政治哲学および政治的判断力の構想との比較を促している」としている点で、大変刺激的な論点を展開している」と総評を述べた。そのうえで本領とするハイデガーも絡めて、森氏から（多少とも？）挑発的な質問が次々と繰り出された（基礎経験、政治哲学、世代論など）。牧野先生は例によって、それら一つ一つに、じつに丁寧に応答された。





(夕闇に包まれた都心のビル群と東京スカイツリーを背景に、スカイホールでのシンポジウムは佳境に入った)

以上を踏まえて【**第Ⅲ部 共同討議**】では、森下氏と宮島氏の司会で、まず第Ⅰ部・第Ⅱ部の登壇者全員による「**著者と登壇者の質疑応答**」が、次いで登壇者と対面参加者による**フロアを交えた意見交換**が行なわれた。残り時間は限られていたが「**構想力**」の問題を中心として活発な議論が繰り広げられた。

最後の【**結び**】では、宮島氏の「**企画立案者の御礼**」に続き、協賛者を代表して内藤 淳先生（法政大学教授）が「**閉会の辞**」を述べられた。そこでは、牧野英二先生が法政大学で哲学の教育に心血を注がれ、自主的な思考や対話的な精神の涵養を重視されたことが強調された。

本シンポジウムがそうした牧野先生の哲学的精神を継承できたとすれば、開催者として望外の幸せである。無理難題に付き合ってくださいました牧野先生はじめ登壇者の皆さまに、改めて厚く御礼を申し上げたい。



(会場の様子)



(内藤 淳先生)

最後に本公開シンポジウムを全面的にサポートしてくださいました国際日本学研究所の事務担当者各位にも心より感謝を申し上げます。そしてもちろん、本シンポジウムに関心を持ってくださった皆さまにも。

〔謝辞〕 本研究は JSPS 科研費 JP21K00006 の助成を受けたものです。

宮島光志（法政大学国際日本学研究所客員所員）